

〈資料紹介〉 実相院蔵『源氏物語画解説（抄）』

櫛 井 亜 依

はじめに

京都岩倉にある天台宗寺門派実相院に、不思議な一通の資料が保管されている。

本資料の際立って特異な点は、その構成である。本資料には奥書はなく、『源氏物語』の二二の場面について、『源氏物語』本文の抜き書きに、絵に關しての短い「解説」のような注が付されている。そして、その場面は、物語の順序を乱す形で配列されている。

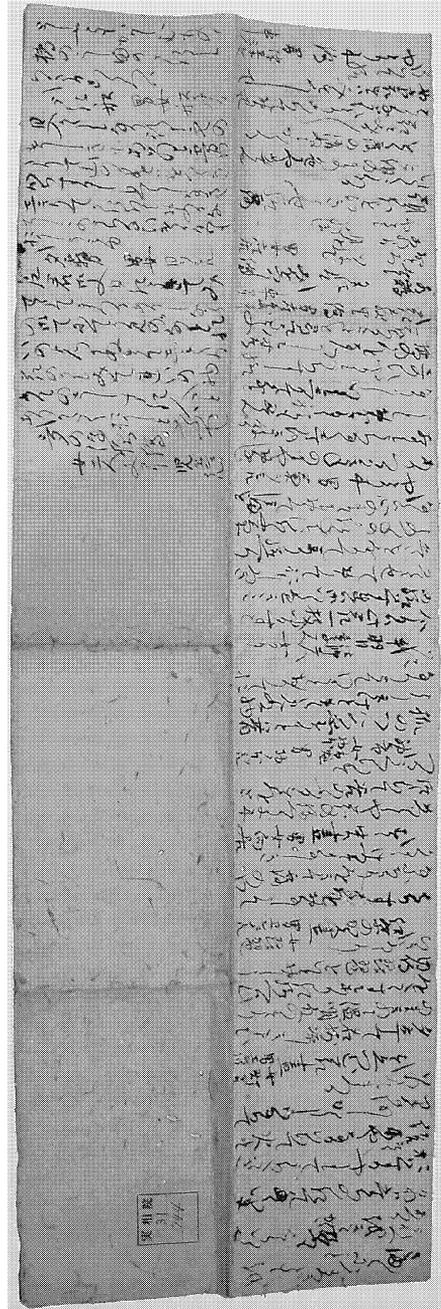
京都府教育委員会の作成した『京都府古文書等緊急調査報告書 天台宗寺門派実相院 古文書目録』には、資料名は「源氏物語画解説（抄）」となっている。^①本資料のように絵を持たず源氏絵を解説する資料としては、大阪女子大学本『源氏物語絵詞』や京都大学本『源氏絵詞』がよく知られており、絵入りの資料でも『源氏物語』

の梗概書である『源氏綱目』には、挿絵の解説が見受けられる。今挙げたこれらの資料の解説は、源氏絵の、主に描く側の手引きであった。しかし、本資料名にもなっているこの「画解説」は、これらとは性格が異なるように思われる。結論を先に言うと、この資料が、いかなる意図によって、どのような典拠をもとにして成立したものは、特定することは出来なかった。しかし、源氏絵や『源氏物語』諸本の大きな体系の中で見たとき、この資料の特徴は浮かび上がってくるのではないか。また、『源氏物語』の享受の一端が、この資料に窺えるのではないだろうか。以下、本資料の翻刻と、そこから考えられる一考察を記し、資料紹介したい。

一・書誌

整理番号、三一箱七四四。

〈資料紹介〉 実相院蔵『源氏物語画解説（抄）』



縦十七・三センチ、横五三・一センチ。畳み物。一舗。奉書紙。

八つ折にされている。外題なし。奥書なし。

懐紙が横に二つ折りにされ、上段、下段の二段に段組されている。

折り目の和が行末となる方向に本文が書かれている。

二、翻刻

【凡例】

一、できるかぎり資料の書写の様態をそのままの形で残すことを目指す。そのために、旧漢字は新漢字に改めることをせず、異体字

もできるかぎりそのままに残す。

① 踊り字は、「ゝ」「々」「く」を区別して用いるものとする。
分かち書きは「」内に、「」を用いて示し、字の大きさは意図的に全て統一した。

② 各行の行頭の位置は、前の行の文字と対応する位置に記した。

③ 5行ごとの行頭に、便宜的に行番号を打った。なお、散らし書きの箇所は変則的に、読む順に行番号を付した。

一、文字の翻刻にあたって、次のような原則を立てた。

① 紙の保存状態から判読できなかった文字は、「□」を用いて

記した。

② 塗抹などで文字が訂正され、元の字形の推定が可能な場合はそれを記し、「 」内に訂正後の文字を記した。

一、詞書の後に記された巻名全てに合点が施されているが、これらについては表記しなかった。

【翻刻】

さまぐに〔人わろき／こと〕ともを

〔うれへ／あへる〕をき、〔給ふも／かた〕はらいた

ければたちのきてた、いま

おはするやうにてうちた、き

5 給所〔訂正—そ、〕やなるいひて火と

りなほしかうしはなちて

いれたてまつる

すゑつむ花畫〔女灯アリ／男エンノ□□〕

夕立して名残涼しきよひ

10 のまきれに温明殿のわたり

をた、すみありき給へは此

内侍琵琶をいとおかしう

ひきあたり

紅葉の賀畫〔女琵琶／男エンニイル〕

〔資料紹介〕実相院蔵『源氏物語画解説（抄）』

15 はちすはをおなしうて

なちきりをきて露のわ

かる、けふそかなしき

す、虫畫男女向居

めつらしや花のねくらに木

20 つたひて谷のふるすをと

つるうくひす

初音女〔□□／物本〕男物ノ本ヲミル

狐のへんくゑすることは昔

よりきけとまた見ぬ物

25 なりとしてわざとおりてお

はす

手習〔法師二人／童子一人〕女アリ

今日は此花一枝ゆるすと

の給はすれば御いらへきこ

30 えさせておりておもしろき

ゑたををりて参り給へり

よのつねのかきねにほふ菊

ならは心のま、におりてみましを

やとり木 男 菊ヲミル

35 ありつるかさねのにおなし

聲にうちなくしたひきにけり

ことおほざる、程もえん

なりかしいまにしりてかなと

しのひやかにうちすし給

40 橘のかをなつかしみ時鳥

花ちるさとを尋てそこふ

花散里 繪〔男座敷ニアリ／車アリ〕

水鶏 かさす

たに は みをつくし繪

45 おとろ いかにして 男女座居

あれたる 月を

50 やとに いれまし

55 朝かほをひきよせ給露

いたくこほる

今朝のまの色にやめてん

をく露の消ぬにかゝる

花とみるく

60 はかなとひとりこちておりても

女良花をはみすくして

そいて給

やとり木繪男〔付エホシ三人／車〕（上段）

としふともかはしむものか

65 橘のこしまのさきに

ちきるころは

うき船 男女船にのる

日入かたになり行に空の

けしきもあはれに雰わ

70 たりて山のかけはをくらき

心ちするも日くらしなき

しきりてかきほにおふるな

てしこのうちなひける色も

おかしうみゆ

75 夕霧 男女日ヲミル

尼君御文日きすきてみ

せたてまつるありしなから

の御てにてかみのかなとれ

いのよつかぬまでしみたる

80 花のかにみてれいの物

めてのさしすき人いと

ありかたよくおかしと思ふ也

夢の浮橋繪

84 女二人文アリ児エンニイル（下段）

三、構成について

本資料では、『源氏物語』の一一の巻から、一二の場面が選ばられ、配列されている。宿木巻のみ二場面を取り、他は一つの巻に対して一場面が選ばれている。また、巻の配列順序であるが、先に述べたように、『源氏物語』本文とは異なっている。一二場面の内、『源氏物語』本来の巻の順序では最も早い末摘花が冒頭に置かれ、最終巻の夢浮橋が最後に配置されているが、中の順序に乱れが生じている。また、選んだ場面内容にも特に共通点は見られない。では、本資料の所収場面について確認したい。

大阪女子大学本『源氏物語絵詞』については、清水好子氏によって詳細に紹介されていることは周知の通りである。さらに、秋山光和氏は、この大阪女子大学本『源氏物語絵詞』を基準として、その所収場面を他の作品と比較しながら、対照表を作成されている。この『源氏物語絵詞』は、先に触れたように、本資料同様、絵を持たず、詞書と同様指定で構成されており、その所収場面の多さからも今回注目すべき資料である。そこでまず、伊井春樹氏が秋山氏の対

照表を踏まえて作成された「源氏物語場面一覧表」^①の中に、この実相院の資料を置いてみることで所収場面を確認したい。この一覧表を、実相院蔵『源氏物語画解説（抄）』に所収される場面を中心に作成しなおしたものが、【表A】である。ここでは、実相院蔵『源氏物語画解説（抄）』に所収される場面のみを、その配列順に従って通し番号を付し、挙げた。また、対照させる資料は、先に述べた大阪女子大学本『源氏物語絵詞』に加え、静嘉堂文庫本『源氏絵詞』、詳しくは後述するが図様指定の形式について着目すべき京都大学本『源氏絵詞』に限定した。

この表からみると、本資料は、これらのどの資料とも内容は一致していない。『絵詞』の類の中で最も本資料と共通の場面を持つ大阪女子大学本と比較しても、一二場面中、③鈴虫、④初音、⑪夕霧の三場面に該当するものがない。特に、⑪に関しては、どの資料該当する場面は確認できなかった。また、大阪女子大学本では所収されていても、②紅葉賀、⑤手習、⑨宿木、⑫夢浮橋のように、他の資料ではあまり引かれることがなかった場面が多く見られる。現在先行研究において、源氏絵のデザイン集として考えられているこれらの資料との比較から鑑みて、これらとは異なる趣向の下に本資料の場面は編纂されたようである。

では、次に実際に絵画化された源氏絵と本資料を比較してみたい。

【表 A】

巻名	実相院蔵『源氏物語画解説（抄）』場面	大阪女子大 学本	源氏綱目	静嘉堂本	京都大学本
① 末摘花	雪の夜、末摘花を訪れその貧しき生活を見る。（12段後半）			○	
② 紅葉賀	源氏、温明殿のあたりを歩き、琵琶をひく源内侍に戯れる。（6）				
③ 鈴虫	源氏、懇ろに女三の宮を導く。（3段）			○	○
④ 初音	暮方、明石上の居所に至りて一泊。（7段）				
⑤ 手習	木の下に倒れ伏す浮舟を、僧たちを見つけ、衣をあげて見ようとする。（1）	○			
⑥ 宿木	帝、薫と碁をうち、賭物に庭前の菊を折らす。	○		○	○
⑦ 花散里	源氏、麗景殿女御（花散里）の邸でも時鳥をさき、語りあう。（2）	○		○	○
⑧ 滯標	五月の臘月夜に、源氏、花散里を訪れ、端近く出て荒れた庭をみる。（1）	○			○
⑨ 宿木	薫、中君を訪ねようと車の用意をし、庭の朝顔を折る。秋草咲く。（2）	○			
⑩ 浮舟	雪の中を匂宮浮舟を船にのせ宇治川を渡る。橘の小鳥で愛を誓う。（6）	○		○	○
⑪ 夕霧	暮色深く、あはれを添ふる山荘。（8段）				
⑫ 夢浮橋	小君、薫の文を小野に届け、尼公これを開いて浮舟に読ます。（2）	○			

（注）

・この表は、『源氏綱目 付源氏絵詞』（伊井春樹編、桜楓社、一九八四年五月、四七七―四八五頁）に掲載されている「源氏物語場面一覧表」を参考に作成した。この表と同様に、大阪女子大書本『源氏物語絵詞』と共通する場面については、秋山光和氏が作成した「場面一覧と作品例の対照表」（『日本の美術源氏絵』第一一九号）と比較しやすいように、「対照表」の場面番号、場面の見出しを用いた。また、「対照表」にはなく、「一覧表」には挙げられている場面番号、場面の見出しの表記は、「一覧表」に従った。

・実相院『源氏物語画解説（抄）』に配列されている場面に通し番号を付し、その番号の場面を所収する作品には、「○」を記した。

・⑪夕霧に該当する場面は、大阪女子大書本『源氏物語絵詞』、『源氏綱目』、静嘉堂本『源氏絵詞』、京都大学本『源氏絵詞』に該当するものがなく、また、参考にした伊井春樹氏の表、秋山光和氏の表にも、該当する場面を持った資料は見当たらなかった。従って、この場面の概要は、参考にした二つの表同様、池田亀鑑校注『日本古典全書』『源氏物語（朝日新聞社）』の見出しの説明文と段数を引用して表記した。

【表B】

	①末摘花	②紅葉賀	③鈴虫	④初音	⑤手習	⑥宿木	⑦花散里	⑧滌標	⑨宿木	⑩浮舟	⑪夕霧	⑫夢浮橋	
										○			浄土寺本扇面
										○			藤岡家本扇面
					※341	○		○				○	久保惣本光吉画帖
			○										京博本光吉画帖
				○			○						徳川美術館本光則画帖
				○									フリア本光則白描画帖
							○						パーク本光則白描画帖
				○			○						堺市博色紙
							○						個人蔵屏風貼交色紙
				○		○	○					○	個人蔵光起画帖
京						京	根京						その他土佐派画帖色紙※1
				○			○						個人蔵如慶画帖
				○				○					茶道文化研具慶絵巻
													個人およびMOA美術館蔵具慶筆絵巻
										○			個人蔵色紙
										○			個人蔵五十四帖屏風
				○		○	○	○		○			氏信五十四帖屏風
				○		○	○			○			出光美勝友五十四帖屏風
							○	○		○			旧団家伊年印五十四帖屏風
											メ		屏風各種※2

(注)

・この表は、「豪華(源氏絵)の世界 源氏物語(秋山虔、田口榮一監修、学習研究社、一九九九年七月、二九〇―三〇二頁)に掲載されている「源氏絵帖別場面一覧」を参考に作成した。

・実相院蔵「源氏物語画解説(抄)」に配列されている場面を通し番号を付し、その番号の場面を所収する作品には、「○」を記した。

※1 「その他土佐派画帖色紙」の項目については、根津美術館蔵伝土佐光則筆画帖は「根」、京都民芸館蔵色紙は「京」と表記した。

※2 「各種屏風」の項目については、東京国立博物館蔵土佐光起筆六曲一双屏風は「東」、メトロポリタン美術館蔵土佐光起筆四曲一双屏風は「メ」と表記した。

※3 実相院蔵「源氏物語画解説(抄)」の⑤の詞書に対して、日本古典文学大系「源氏物語(岩波書店)」における該当頁は32頁であった。一方、田口氏の作成した表に記された資料の、この場面の該当頁は31頁と異なるが、31頁と32頁は同一場面であり、表の中で、他にこの場面を持つ作品がないため、特に取り上げた。ただし、表記は、「○」ではなく、頁数で記載した。

〔資料紹介〕 実相院蔵「源氏物語画解説(抄)」

『絵詞』の類には確認できなくても、源氏絵として現存している場面も多い。ここでは田口榮一氏の「源氏絵帖別場面一覧」^⑤を基に作成した【表B】を用いて、本資料の場面を確認したい。

この表からも、所収内容が全て共通するものは確認できない。最も共通する場面を持つ作品は、「個人蔵光起画帖」で七場面が該当する。続いて「京都民芸館蔵色紙」と「氏信五十四帖屏風」で六場面となる。また、描かれている場面別にみると、⑨宿木のように、これらの資料には全く確認できなかったり、⑤手習のように近似してはいるが異なる場面の資料（【表B】※3参照）が一作品しか確認できなかったりする場合が着目される。また、③鈴虫や⑪夕霧もそれぞれ一作品のみである。⑦花散里が一〇作品、④初音が九作品、⑥宿木と⑩浮舟が八作品と、源氏絵の中で比較的好んで描かれたと思われる場面が含まれる一方、このようにほとんど描かれることがなかった場面も有していることも、わずかに二場面しか有さない本資料においては特徴と言えるのではないだろうか。

四．詞書について

本資料の詞書は、極めて短い。地の文のみ、あるいは和歌のみ、または両方を書くものがある。表記の仕方は、源氏絵の注記以外に、本文の1、2行目に分ち書きが、43～54行目に散らし書きが見ら

れ、統一されていない。このような書式であるのは、この資料の典拠となるものが、このような形態の詞書を有していたためかもしれないが、これも仮説にすぎない。

まず、『源氏物語大成』^⑥を参照して、本資料と『源氏物語』本文との異同を確認したい。なお、『源氏物語』諸本の略表記は、『源氏物語大成』に従う。

①末摘花

・5行目「所〔訂正―そ、〕」：諸本全て「そ、」。

・5行目「なる」：諸本全て「なと」。

・5～6行目「とりなほし」：諸本全て「とりなをし」。

③鈴虫

・15～16行目「うてなに」：【別本】麥、阿。（他諸本全て「うてなど」。）

⑤手習

・23行目「へんくゑすることは」：【別本】池、桃。（へんくゑするは【青表紙本】榊、二。「へんけすとは」【別本】宮、國。「へんけんすとは」【別本】陽。「へむすとは」【別本】保。その他諸本全て「へんくゑするとは」。）

⑦花散里

・39行目「うちすし」：【青表紙本】三。（「くちすさひ」【河内

本】全て。その他諸本全て「うちすんし。」

⑨ 宿木

- 55行目「ひきよせ給」…【青表紙本】横、池、三【河内本】尾、平、鳳、大【別本】宮、國。（「ひきよせ給に」【青表紙本】肖
- 【別本】陽、阿。「ひきよせたまふに」【河内本】御、七。「ひきよせたるに」【別本】保。その他諸本全て「ひきよせ給へる」。
- 60行目「おりても」…「おりても給へる」【別本】桃。その他諸本全て「おりてもたまへり」。
- 61-62行目「みすくしてそ」…該当する諸本なし。（「みすてきてそ」【青表紙本】大。「みすき」【別本】陽。その他諸本全て「みすきてそ」。）

62行目「いて給」…該当する本文なし。（「たまへり」【別本】陽。その他諸本全て「いて給ぬる」。）

⑩ 浮舟

64行目「かはしむ」…諸本全て「かはらん」。

⑪ 夕霧

- 71行目「心ちするも」…諸本全て「心ちするに」。
- 71行目「日くらし」…【青表紙本】横、池、肖、三【河内本】七、宮、尾、加、鳳、大【別本】全て。（その他諸本全て「ひくらしの」。）

（資料紹介）実相院蔵『源氏物語画解説（抄）』

⑫ 夢浮橋

79行目「しみたる」…【青表紙本】平。（その他諸本全て「しみたり」。）

80行目「花のかに」…諸本全て「ほのかに」。

以上、『源氏物語』諸本との異同を確認した。助詞や助動詞に本資料にしか確認できない語句が散見できる。諸本に同様の異文が確認できる箇所もあるが、本資料で引用される本文が短いため、どの系統に近いかという推定はしづらい。ただ、ここから明確に浮かび上がってくることは、これらの詞書は、極めて本文に忠実であるということである。これらの詞書の中からは、大幅な書き換えや省略は見られず、本文の要約や解釈を記したものもない。さらにもう一つ言えるのは、詞書が極めて短いため、図様指定と合わせみても、よほど『源氏物語』本文を知らなければ、どのような場面であるか、また誰が詠んだ歌なのか、本資料から詳細にその場面を想起するのは難しいということである。大阪女子大学本『源氏物語絵詞』も短い詞書を持つとして、清水好子氏は連歌師による『源氏物語』受容の面から、次のように考察されている。

おそらくこの詞書も高貴の能筆の方々の手を煩わせば、意味はさほど通じなくてもよかつたのであろう。いや、それよりも、源氏物語の文句であれば、謎のような二三行でも十分だったの

であろう。（中略）彼らは連歌をつくる上で、ことに物語中の語句を重んじたが、小鑑類と照合すると、図様指定の場合の考察からすでに予想されることではあつたが、詞書の文章はおおむねそれらの「権威ある言葉」を含んでいるのであつた。源氏物語といえは一字一句がうやうやしく扱われた時代だつたのである。^⑦

この清水氏の指摘から考えると、本資料も、このような意図によるものであつたのかもしれない。勿論『源氏物語』自体や源氏絵に対する興味ゆえに書写された可能性もある。しかし、本資料の構成の不自然さを加味すると、『源氏物語』の内容というよりも、『源氏物語』の言葉そのものを書き取ることを主眼としていたのではないだろうか。

五、図様指定について

図様指定は、大阪女子大学本などに比べると、詳細とは言えない。仮に本資料が源氏絵のデザイン集だとすると、この情報では、これだけをもとに絵を描くことは難しいのではないだろうか。また、本資料は、描かれた源氏絵の場面の特徴となるものを文章で説明するのではなく、単語と短文を列挙している点で、京都大学本『源氏絵詞』の図様指定の形式が類似している。ただし、京都大学本がその

場面に描かれるべき人物や衣装、品物など場面全体に着目して図様指定が記されているのに対して、実相院資料は人物の居場所や行動が中心となっている。

さらに、ここで図様指定に用いられている言葉に着目したい。④初音の図様指定に「物ノ本」とあるが、『源氏物語』本文で「物ノ本」という言葉は用いられることはない。『源氏物語』では、この場面では草子を光源氏は手にとつて見ている。調査した限りでは、この場面に関して「物ノ本」という言葉が見える古注釈・梗概は確認できていない。従つて、この図様形式に関しては、『源氏物語』のこの場面を詳細に知らない人物が関わり、このような表記となっていると考えられる。

この図様指定は、絵を描くためなど、第三者に伝えることを目的としていないのではないだろうか。

まとめ

以上、本資料を分析してきたが、現時点で、絵巻や絵詞、画帖、絵入りの刊本のどれも、本資料と完璧に符合する所収内容、本文箇所を持つものはなかった。複数の資料をもとに作成された可能性もあるが、それを特定することはできない。したがつて、ここでは、管見ではあるが、本資料の構成、詞書、図様指定の分析から考察で

きる仮説を述べて資料紹介のまとめとしたい。

本資料の所収場面は、『源氏物語』の巻の順序を乱す形で構成されているが、そこに物語を再構築することによって享受しようとするような一例えば、四季絵として扇面や屏風に描かれた源氏絵や、瀟湘八景になぞらえて場面が構成された『源氏八景』のような一統一された規則性やテーマを見出すことはできない。また、詞書の短さや図様指定の情報量からして、ここから場面を絵面化することは難しい。しかし、『源氏物語』の絵面化や源氏絵のデザイン集を指摘したのではないと考えたらどうだろうか。人物を中心とする視点に基づく、『源氏物語』の本文とは異なる内容の図様指定は、この資料を書いた人物自身の言葉なのではないか。つまり、本資料の「画解説」は、絵を描く側へ向けて書かれたものではない。実際に源氏絵を見た人物が、典拠となる源氏絵を目の前にして、その記憶をとどめておくための覚書であったのではないだろうか。『源氏物語』の言葉を正確に書き留めようという意思が、分ち書きや散らし書きが入り混じった不統一な書式や、『源氏物語』本文に忠実な詞書から感じられる。不自然な構成も、物語の内容理解ではなく、何か目的や意図があって、『源氏物語』の言葉を書き留めたかっからではないだろうか。

これは、当時描かれた源氏絵の内容を知ることができるとともに、

〔資料紹介〕実相院蔵『源氏物語画解説（抄）〕

その源氏絵がどのように享受されたかが窺える資料である。源氏絵自体を持つのではなく、自分が見た源氏絵とその詞書を懐紙などに写し取り持っていたことが推測できる。

以上の報告にあたり、識者からの御斧正を賜わることができれば、幸いである。

注

- ① 京都府教育委員会編集『京都府古文書等緊急調査報告書 天台宗寺門派実相院 古文書目録』、一九八二年三月。
- ② 清水好子「源氏物語絵画の一方―新資料『源氏物語絵詞』紹介」『国語国文』第二九巻第五号―三〇九号、一九六〇年五月。
- ③ 秋山光和「日本の美術 源氏絵」第二一九号、一九七六年四月。
- ④ 伊井春樹編『源氏綱目 付源氏絵詞』（源氏物語古注集成 第一〇巻）、桜楓社、一九八四年五月。
- ⑤ 秋山虔、田口榮一監修『豪華（源氏絵）の世界 源氏物語』、学習研究社、一九九九年七月、二九〇―三〇一頁。
- ⑥ 池田亀鑑編著『源氏物語大成』第一冊―第六冊、中央公論社、一九八四年一〇月―一九八五年三月。
- ⑦ 前掲論文②による。

〔付記〕

今回の報告にあたって、資料の内容を公表する御許可をいただいた実相院御門跡に、心からの謝意を表します。